

幼馴染みの魔法少女が「覚醒のためにセックスしてくれ」
と言ってきた

目次

- 【登場人物】…………… 3
- 【幼馴染みの魔法少女が覚醒のためにセックスしてくれと言ってきた】…… 4
- 【両想いになったはずの幼馴染が何故かツンツンしてくる】エラー！ブックマークが定義されています。
- 【「魔法少女（幼馴染）」が魔法少女と幼馴染に分身して迫ってきた】エラー！ブックマークが定義されています。
- 【魔法少女と幼馴染は学校でもいちゃいちゃする】エラー！ブックマークが定義されています。
- 【魔法少女と幼馴染のデートはやっぱり少し変わっている】エラー！ブックマークが定義されています。
- 【魔法少女をしている幼馴染と海でもいちゃいちゃする】エラー！ブックマ

ークが定義されていません。

【幼馴染（魔法少女）が一周年記念日に愛の結晶を求めてきた】エラー！ブックマークが定義されていません。

【恋人魔法少女（小）と恋人魔法少女（大）が現れた】エラー！ブックマークが定義されていません。

【登場人物】

○丈（たける）

主人公。ごく普通の高校生。

○可憐（かれん）

ヒロイン。丈の幼馴染で同級生。

○ホワイトエンジェル

魔法少女。正体は可憐。



※※画像はイメージです。

ランダム生成ツールから抽出したもので参考程度にお考えください。

【幼馴染りの魔法少女が覚醒のためにセックスしてくれと言ってきた】

腕の下で女の子が仰向けになっている。

歳は十五か十六。瞳を潤ませ、呼吸をかすかに乱している。床に広がったロングヘアや剥きだしになった首筋からは独特の甘い匂いがする。

彼女の纏う白いコスチュームはジャケットとインナー、スカートの複合型。下腹部は剥き出しで、ジャケットの隙間から小さな臍が覗く。胸元の大きな5リボンの下には豊かな膨らみがあり、活動的なミニ丈スカートは生足が伸び、太腿あたりからは白いロングブーツを装着していた。

袖なしのジャケットから伸びる細い両腕は長い手袋に包まれているものの、右手に握られているべき愛用のステッキは力なく床に転がっている。

「いい、ですよ」

艶めいた唇がかすかに動き、囁くように声を漏らす。

「わたしのはじめて、あなたにあげます」

思わずごくりと唾を飲み込んだ。

「……後から駄目って言われても、止まれないからな」

「はい……」

こくん、と。

少女の首が縦に動くのを確認してから、俺は、柔らかそうな唇へと顔を近づけて――。

ごん、と、頭に衝撃が走った。

甘い幸福な夢は儚くも消え、机の硬い感触と真っ暗な視界が帰ってくる。

「痛ってえな」

ぼやきつつ顔を上げると、幼馴染の可憐がジト目&見下ろしポーズを取っていた。

「おはよう？」

わざとらしい問いかけに首を巡らせれば、世界は夕闇色に染まっていた。クラスメートは全員下校したのか、教室には俺達以外誰もいない。

「……おお、結構寝てたな」

「寝てたな、じゃないわよ！ あんた、私が起こさなかったら夜までぐっすりコースよ？」

呆れ半分、怒り半分で説教してくる可憐の右手には、教科書がぎっしりと詰まった通学鞆。凶器はアレか。

人を起こすのに鈍器を使うとは容赦ない女だ。

まあ、起こしてくれたのは有難いんだが……。

「どうせならもっと早く起こせよ」

「起こしてもらったって何よその言い草」

「寝るなら家帰ってベッドで寝たいだろ？」

「こっちの台詞なんだけど!？」

だってさあ、授業終わってかなり経ってるぞ？

俺の顔に落書きでもしてたのかと尋ねると「用事を済ませてたのよ」と顔を背けた。夕日のせいで良く見えないが、さぞかし高慢な顔をしているに違いない。

こいつは優等生だから、先生から何か頼まれることも少くない。だが、自慢されるといらっとする。

俺はため息をついて、

「まあいいや、用事終わってたんなら帰ろうぜ」

「やっぱ微妙に上から目線よねあんた」

人のこと言えるかお前？

喉元まで出かかったツツコミを、俺は身の安全のために呑み込んだ。

「もう。遅い時間は特に物騒なんだからね？」

帰りの通学路に通行人はまばらだった。

校舎を出る時はまだ明るかった空はだんだん暗くなり始めている。俺達は
普段よりも多少、急いで歩く。

可憐の頭でトレードマークのポニテが揺れるが、制服に包まれた胸は微動
だにしない。結構な大きさなのだが、ブラしてるし服を着てるからな。全力
疾走でもすればまた別だろうが。

「へいへい。……っても、怪人が出たら例の魔法少女が退治してくれるんだ
ろ？」

「そりゃそうだけど。すぐ来られるとは限らないのよ？」

正論と共にジト目で睨まれる。

「っていうか、そんなに信頼してるわけ？ その、魔法少女のこと」

「まあ、一応。特別思い入れはないけど可愛いし」

「っ」

「ん？ どうかしたか？」

「べ、べべべ、別に。頑張って戦ってる子をエロい目で見るとか最低だなんて思っただけ！」

「だってエロすぎだろあの格好」

『夢で見た』せいかイメージが強く残っている。

そう。教室で俺が見ていた夢は件の魔法少女と良い雰囲気になる、というものだった。

彼女の纏っているコスチュームは子供向けアニメによくありそうな可愛い

系なのだが、リアル女子が着ると妙に色気が出るのだ。

何年も戦ってるせいかな、胸とか足とか成長してるからかもしれない。

「……さいつてー」

可憐は俺の顔さえ見たくないのか遠くを見ていた。

「別にいいだろ。妄想だけならタダだ」

「ふ、ふーん。じゃあさ、もしあの子とエッチできるって言ったなら——」

こつちを向いた可憐が何やら言いかけた時、

——みし。

世界が軋むような音と共に、『それ』は何の前触れもなく現れた。

「え？ ……あ？」

身長二メートルはあろうかという怪物が、俺達の行く手を阻んでいた。

緑色の外皮と硬い鱗、鋭い爪や牙を持った「二足歩行するドラゴン」としか言いようのない化け物は着ぐるみ、特殊メイク、CGのどれとも違う、生きた生物としての威圧感を備えていた。

「怪人」。

人類を脅かす地球外からの侵略者達が最初に現れたのはもう十年近く前になる。

今ではみんなすっかりこいつらの存在に慣れているが——大抵の人間は、まさか自分の前に現れるなんて考えてもいない。言ってしまうえば天災みたいなもの。

出くわしたら運が悪かった。そういう風に扱われている。
だから、

「丈（たける）っ！」

驚くほど鋭い可憐の声に叱咤されるまで、俺は呆然と立ちすくんでいた。

「逃げよう！ 逃げるの！ 早く！」

「あ、ああ……ああっ！」

かくかくと頷いて踵を返す。

逃げる。そうだ、逃げるしかない。あれは危険だ。テレビやネットでは何
度も画像を見ていたが、肉眼で見初めてわかった。あれは『死』だ。関わ
ったら殺される。

一目散に駆けだした俺達の後ろで、笑うような唸り声が上がった。

と、前方に分かれ道。

「私はこっち、あんたはそっち、分かれて逃げよう！」

「だ、だけど、それじゃどっちかが！」

「どっちかが助かる。追われなかった方は助けを呼ぶ。こういう時のルール、
学校で習ったでしょ!？」

はっとした。

二人一緒よりバラバラの方が生存率は高まる。助かった方はもう一方を助けるためにできることをする。怪人が出現するようになってから定められた基本的な対処法。

時間さえ稼げば、後は警察や『彼女達』が助けてくれる。

「わ、わかった」

普段偉そうなことを言っても、俺には何もできない。

男も女も関係ない。

奴らは種族からして違うんだ。

「だ、だけど、死ぬなよ!? 絶対、二人で助かるからな!」

「当たり前でしょ!? ほら早く、ここで立ち止まってたら意味ない!」

ずしん、ずしん。

怪人の足音が響いている。大股で、ゆっくりりと。急いで追いかけてなくても

問題ないと知っているかのように。

死。

刻一刻と迫る命の危険から、俺は、後ろを振り返らず必死に逃げ続けた。

逃げて。逃げて。逃げ続けて。

追っ手が無いと気づいたのは、自宅周辺まで辿り着いてからだった。

逃げている間に救助コールはしてある。政府開発の専用アプリのお陰だ。

可憐に口うるさく言われてしぶしぶ入れていたのが役に立った。そうでなかったら110番した挙句、しどろもどろの説明しかできなかつただろう。

連絡が遅れれば遅れただけ被害が増える。

この場合の被害者とは、

「っ。そうだ、可憐は!？」

自宅に駆け込みながら幼馴染の番号をコール。

出ない。

出ない!

幼馴染のスマホには何度かけても繋がらなかった。

両親に事情を話してから部屋に駆け込み、閉じこもる。あいつの無事を確認するまでは何もできそうになかった。

……それから、約一時間が経った。

可憐に電話した回数は百回以上。

暗くなった室内にぼんやり浮かび上がるスマホ画面に新着の通知は一度も

来ていない。右上のバッテリー表示はもうゼロに近かった。

充電ケーブルを挿すために動く気力もない。

話せるならとつくに折り返しが来ているはず。ということは――。

いや。

単にスマホを落としたただけかもしれない。警察に保護されていてそれほどろじゃないとか。

「だけど、俺が襲われなかったってことは……」

アプリを操作して怪人出現情報をチェック。

この街の情報に新着があった。

直立する竜型の怪人――撃退に成功。今のところ被害者は確認できず。良かったんだろうか。今のところ、という注釈が引っかかる。

締め付けられるような胸の痛みはまだ引かない。
と。

すっかり暗くなった室内に、突然、ぱあっと光が満ちた。

殺風景な俺の部屋に一人の女の子が下り立つ。

「魔法、少女？」

彼女の顔、それから白いコスチュームには見覚えがあった。

夢で見たのと違いジャケットもインナーも、スカートさえボロボロで、白い肌があちこち覗いているが、間違いなく「この街の魔法少女」だ。

魔法少女は呆然とする俺へにっこりと笑いかけると、部屋のドアの傍まで歩いて行って照明のスイッチを押した。

俗っぽい動きに呆気にとられる。

窓に歩み寄ってカーテンを閉じる少女をしばらく見守って――。

「お、お前。えっと、ホワイトミルク？」

「そんないかがわしい名前じゃありません。私の名前は『ホワイトエンジェル』です」

白い天使も若干いかがわしい気はするが、思い出した。

彼女の名前はホワイトエンジェル。

魔法少女は怪人の出現と同時期に登場した正義のヒーロー（ヒロイン？）だ。普通の女子小学生や女子中学生が妖精、精霊、女神等の超常存在から選ばれ、変身の力を持ったもの。年々数は増えていて、今では日本中にご当地魔法少女がいる。

我が街の魔法少女は名前通り白いコスチュームが特徴の、オーソドックスなタイプ。

ステッキから放つ魔法弾での遠距離戦を得意とし、近づかれても剣や槍の形にステッキを変形させて対処するため、怪我を負うことは少ないのだが、

「その格好……負けた、のか？」

「いえ。倒すことはできませんでしたが、怪人は撃退しました。怪我也治っているので心配ありません」

ホワイトエンジェルが目の前に立った。

ベッドに座ったままの俺は彼女を見上げる形になる。確かに、コスチュームの端々から覗く肌はすべて綺麗なものだ。

「じゃあ、どうして……？　っていうか、可憐は!?　怪人に襲われてる女の子がいただろ!？」

「ふふっ。大丈夫です。彼女は無事に家へ帰りました。今は疲れていますので、時間を置いて電話してあげてください」

「そうか。……ありがとう」

心の底からほっとした。

可憐は助かった。ホワイトエンジェルが助けてくれた。魔法少女は強い。

魔法の力を使って怪人とも互角に戦える。

「本当に、ありがとう」

この子がいなかったら、俺は幼馴染の葬式に出なきゃいけなかったかもしれない。

「いいえ。その子のこと、大切なんですよね？」

「……いや。別にそんなじゃねえけど」

にっこりと首を振った魔法少女にからかわれ、俺は思わず首を振ってしま
う。あいつのいなくなった世界なんて考えられないが、そんなこと、口にす
るのは照れくさい。

すると、

「……ふうん？」

頬を膨らませてこっちを見てくるホワイトエンジェル。なんか不機嫌にな
ってないか？　なんでだ？

「あの、どうかしたのか？」

「いいえ、なんでも。それよりも丈さん」

「ん？」

名前を呼ばれた。

何で知っているんだ。顔を上げた俺は、怪人さえ倒す可憐な少女の、真摯で純粋な瞳に目を奪われた。

綺麗だ。

思ううちに言葉が投げかけられる。

「あなたにお願いがあるんです」

「お願い……？」

「はい。どうかわたしを——ホワイトエンジェルを、抱いてくれませんか？」
言われたことを理解するのに、十秒近い時間がかかった。

「……抱くって、ハグ、とか？」

「違います。わたしと、セックスして欲しいんです」

「なっ……」

淫らな単語を口にしたホワイトエンジェルはほんのり頬を染めている。

これは、夕方見た夢の続きなのか……？

現実感の無さから思えば、白くて小さい手が伸びてきて俺の頬をつねった。

「痛い」

「夢じゃありません。冗談でもありません。わたしは、あなたとセックスし
ないといけないんです」

「っ。理由、聞かせてくれないか？」

「はい」

少女はこくと頷いた。